カムィヤキ古窯跡群

(大島郡伊仙町阿三, 伊仙, 検福)

位置と環境

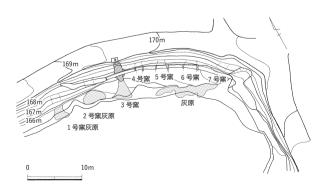
カムィヤキとは、11世紀から14世紀頃に徳之島で 生産されていた焼き物である。これらは南九州の一 部(鹿児島県串木野市、金峰町、出水市、隼人町な ど)から琉球列島全域(トカラ列島、奄美諸島、沖 縄諸島、先島諸島)に分布する。距離にして約1200 kmの広範囲に渡り流通していた。

器は還元焰によって焼成され、硬質な仕上がりとなる。その種類は、壺を主体に、鉢、碗、甕、水注で構成され、日本の中世須恵器と類似する。しかし、焼き仕上がりの色調、器体に巡らされた波状沈線文、綾杉状の叩き文様などの特徴は、朝鮮半島産の無釉陶器にも似ている。このことから、日本、朝鮮半島双方の系譜を受け継いだ「南島の中世須恵器」と位置付けられている。

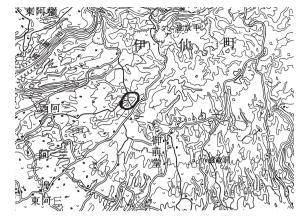
カムィヤキ古窯跡群は、伊仙町字阿三、伊仙、検 福にかけて東西に延びる丘陵地に立地する。地図上 の位置にすると伊仙町のほぼ中央部に当たる。

遺跡の大部分は伊仙国有林内にあるが、一部は民 有地であるサトウキビ畑や水田跡地まで広がる。丘 陵の下方には、低湿地帯が形成されており、水資源 豊富な自然環境が残されている。

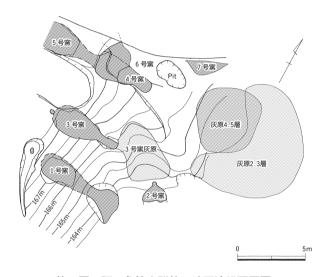
窯跡群は、ヒラスク山(標高211m)から放射状に延びた大きな丘陵を単位として、まとまって分布し、現在7つの支群が把握されている。支群の中でも個々の生産跡は、大きな丘陵に入り込む谷地の傾斜地や谷底に立地する。これらの谷地の中には平坦地、凹地が形成されており、窯跡や灰原などの遺構



第2図 阿三亀焼支群第I地区遺構配置図



第1図 カムィヤキ古窯跡群の位置



第3図 阿三亀焼支群第11地区遺構配置図

は, このような地形の中に並列または重複して発見 される。

窯跡群が点在する丘陵の尾根上には細く延びた道 (里道)があり、これらを通じて支群内、支群間の 行き来が可能である。この点からすれば、それぞれ の生産地区、支群は各々が有機的に連結し、群を構 成すると考えられる。

調査の経緯

カムィヤキ古窯跡群は、地元の四本延宏(当時伊 仙町歴史民俗資料館勤務)と義憲和(当時伊仙郵便 局勤務)よって発見された。

義・四本は、1983年6月、ため池等整備事区内に 陶片や炭化材が無数に散乱し、壁体らしき焼土が露 呈している状況を発見した(阿三亀焼支群第II地 区)。その西側50mの傾斜地の裾部は灰原が露出し ていた(阿三亀焼支群第I地区)。



写真 1 阿三東柳田支群第 I 地区 1 地点 5 号窯

その連絡を受けて鹿児島県教育委員会は窯跡であることを確認し、徳之島がカムィヤキの焼成地であったことが明らかにされた。窯跡群の名称は、発見地の字名亀焼(地元の発音でカムィヤキ)に由来す

る。

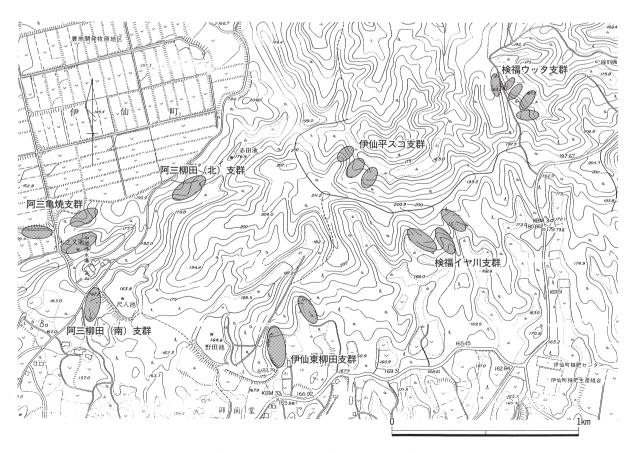
遺構と遺物

阿三亀焼支群第 I 地区では、国、県の補助を受けた重要遺跡確認調査が行なわれ、7基の窯跡とそれに付随する灰原(うち1、2、7号窯は灰原のみの確認)が発見された。6号窯灰原出土木炭と3号窯出土木炭の分析からは、11世紀から13世紀の年代が得られている。

ため池整備区内の阿三亀焼支群第II地区(旧第1 支群)では、開発に伴う調査が行なわれ、窯跡7基 と付随灰原、また帰属窯不明の灰原が5枚検出され た。

窯の構造は、地下式穴窯構造で、焼成部は31から36度と急な傾斜角度をもつ。窯は炊口が極端に窄まったイチジク形の平面形を呈する。この形は、熊本県錦町下り山窯と類似することが指摘されている。出土遺物は、甕、壺、鉢、碗、水注があり、また、馬蹄形を呈した焼台も多量に出土した。

1号窯炊口出土木炭の¹⁴C 年代測定では1050±45 Y. AD, 2号窯,3号窯の熱残留磁器測定により



第4図 カムィヤキ古窯跡群の平面分布

12世紀中頃から13世紀前半の年代が得られ、両者を参考に、11世紀から13世紀の創業年代が推定された。

1996年度から2004年度には、阿三、伊仙、検福国 有林内の惣皆的な分布調査及び磁器探査による確認 調査が行なわれ、阿三柳田(南)支群(旧第3支 群)、阿三柳田(北)支群(旧第4支群)、伊仙東柳 田支群(旧第5,6支群)、伊仙平スコ支群(旧第 9支群)、検福イヤ川支群(旧第7,8,13支群)、 検福ウッタ支群(旧第10,11支群)が新たに発見さ れた。これらを含めると、現在までに計7支群,19 地区24地点で生産跡が確認されている。1地点あた り10基前後の窯で構成されていたと見られ、総数 100基前後の窯が稼動していたと推定される。

焼成は還元焰焼成により、硬質な焼き上がりとなる。胎土は鉄分を多く含んだ花崗岩風化土を素材とする。生産器種は、壺、甕、鉢(すり鉢を含む)、碗、水注の5種で構成されるが、中でも壺が圧倒的に多い。

器種を問わずに叩打によって成形される。
壺甕類は、口縁部まで叩打痕を残し、底部から口縁部まで一貫して叩き締められている。
調整は、ヘラ状工具による回転調整、ハケ目調整、回転ナデ、ヘラケズリが見られる。
独自の波状沈線文によって飾られるものも多い。



写真 2 カムィヤキ古窯跡群出土品

出土品は,A群(器壁は薄く,焼成が堅緻で外器面には叩き痕,内器面には格子目文様の当て具痕を残すもの)とB群(器壁は厚く,焼成が軟質なもの。外器面の叩き文様はナデ,ケズリによって消去される。内器面には細い平行線文の当て具痕が残る)に

大きく分けられる。阿三亀焼支群第II地区1地点 (旧第1支群)の灰原では、下層(灰4,5層)に A群が圧倒的に多く含まれ、上層(灰2,3層)か らB群が増加する様子が見られる。このことは、A 群はB群に先行して出現し、その後B群が徐々に増 加する傾向を示している。

特徴

カムィヤキはトカラ列島から先島諸島の地域を主な流通範囲とする。その意味するところは非常に重要である。なぜなら、カムィヤキの分布域は後の琉球王国の版図と重なるからである。カムィヤキの生産、流通、消費の動向を追及することは、琉球王朝成立過程の歴史解明に向けて極めて示唆的なのである。

資料の所在

出土遺物は、伊仙町歴史民俗資料館に展示・保管 されている。

参考文献

伊仙町教育委員会1985「カムィヤキ古窯跡群 I」 『伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書』 3

伊仙町教育委員会1985「カムィヤキ古窯跡群 II」 『伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書』 5

伊仙町教育委員会2001「カムィヤキ古窯跡群III」 『伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書』11

(伊藤勝徳・新里亮人)